

序

師走恒例の風物詩となった「今年の漢字」、2020年は「密」であった。2020年度は入学式が中止となり、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言(4月16日～5月14日)の発出に始まった。学生の登校禁止、対面授業停止となり、実習は夏休み等に補講もしくはレポート課題オンライン提出で対応した。2学期には実習の対面授業が健康チェック、3密対策、マスク着用、除菌作業等のガイドラインに従って、実施可能とされ、8月4日まで対面実習授業が行われた。夏休み中に牧場の実習も含めて3日間の補講で、授業時間数を確保できた。中国・四国地区大学間連携フィールド演習は多くの大学で学生の受入、派遣を中止したため、牧場実習、「晴れの国岡山」農場体験実習とも中止とした。3学期以降は活動制限レベルが1に引き下げられ、フィールド実習1は畜産施設の見学が不可となった以外は、予定通り実習スケジュールが遂行された。2020年の「収穫祭」は中止となったが、11月14、15日に学生会が立案した企画を組み入れた学部内限定の「農学部フェア」が開催された。

「今年の漢字」、2021年は「金」であった。長く暗いコロナ禍において開催された東京オリンピック・パラリンピックでの日本人選手の活躍や、各界で打ち立てられた「金」字塔がひとときわ輝くニュースとなった年であったが、やはりコロナ禍関連の「金」の話題が多かった。2021年卒業式は文系／理系、午前／午後開催となったが、入学式は代表者のみ出席となった。2021年度は第4波の感染拡大が始まり、4月16日まで対面授業が禁止され、4月19日から対面可となったものの、4月26日に活動制限レベルが2となり、5月19日までオンライン授業となった。しかし、対面実施が不可欠な季節性を伴う実験実習等は部局長に理由書を提出することにより、感染対策に著しく留意して対面実習が可能となり、4月27日以降のフィールド実習2は野菜・果樹の継続栽培を実施し、畑作物実習は補講対応とした。5月10日以降のフィールド基礎実習のうち津高牧場の実習は9月実施の補講に振替、4月12、19、26日の実習は8月～9月に補講対象とした。その後、緊急事態措置が5月16日から5月31日まで発出され、岡山大学の活動制限レベルも3に引き上げられた。さらに岡山県緊急事態措置が6月20日まで延長され、大学の活動制限レベルも維持された。この間、対面授業等を行う場合は、リスクアセスメント及び業務影響分析(BIA)を実施し、策定された業務継続戦略(BCS)に基づき、可否を教学担当理事、部局長が判断することになり、対面授業を行う実験実習は担当教員からBCSを提出して承認を受けることが求められた。BCSについてはセンター主事の福田先生に作成を依頼し、教学担当理事の承認が得られた。緊急事態措置は6月20日に解除され、21日以降大学の活動制限レベルも2に引き下げられ、21日から実習が再開された。感染防止対策については、健康チェック、3密対策、マスク着用、除菌作業、バス乗車定員の半減、更衣室の密を避ける指導等、徹底して行った。7月9日～8月27日まで新型コロナウイルスワクチンの大学拠点接種が始まり、多くの学生・教職員が接種を受けた。8月に実習項目の補講を実施して、何とか乗り切ったかに思えたが、8月20日～9月12日まで岡山県まん延防止等重点措置が要請され、大学の活動制限レベルも再び3に引き上げられた。8月31日にフィールド実習2の補講、9月21日にフィールド基礎実習(岡山農場・津高牧場)の補講が予定されたため、BCSを提出し、承認を得て実施した。

中国・四国地区大学間連携フィールド演習科目の牧場実習(8月30日～9月3日)、「晴れの国岡山」農場体験実習(9月27日～29日)もホテル宿泊、オンライン授業併用、感染防止対策を徹底しても、感染リスクが演習実施による教育効果を上回ると予想され、昨年同様に中止とする旨、8月上旬に世話役担当の広島大学へ連絡した。2020年度に開催予定であったジュニア公開講座「岡大ピオーネづくり名人を目指そう」は本年度に延期され、第1回は6月5日を6月26日に延期して無事開催でき、第2回はBCSが承認されて、9月25日に実施して、15名の小学生に修了証を授与することができた。

10月1日以降は活動制限レベルが1.5に下がったが、対面授業実施のガイドラインに基づいた実施が求められた。未だ部局長決裁のBCS承認が必要とされたものの、講義室等の定員も試験定員まで下げられ、感染者発生時の追跡調査のため座席番号の記録が求められた。3、4学期開講のフィールド実習1の履修者数については、12月にバス移動での津高牧場実習があるため、30名を上限として抽選を行った。健康チェック、3密対策、マスク着用、除菌作業等のガイドラインに従って、順調に実習プログラムが実施された。同窓会の補助を受けた1年生向けの芋掘りがクラス担任の企画によって10月30日に開催された。11月20日(土)には、1、2年生を中心とした学部内限定で、「農学部フェア」、「収穫祭」が開催された。2022年は年始休業以降オミクロン株の感染が拡大し、岡山県はまん延防止等重点措置期間を1月27日から3月6日まで設定し、大学の活動制限レベルも2に引き上げられたが、試験期間に入り、試験定員で粛々と授業が実施された。新型コロナ

感染拡大2年目に当たり、体調に不安のある学生は公欠届けを提出して欠席するよう指導されたこととも関連して、感染者やクラスターを出すことなく、本年度の実習プログラムを終了できた。

「今年の漢字」、2022年は「戦」であった。ロシアのウクライナ侵攻により、「戦」争の恐ろしさを目の当たりにした一年、円安・物価高による生活上での「戦」、スポーツでの熱「戦」・挑「戦」も注目された。2022年度は3月6日にまん延防止等重点措置が解除されて以降、岡山大学の活動制限レベルは1.5となり、卒業式・入学式ともに文系／理系、午前／午後開催となった。GWの予約状況から見ると、全国旅行支援等も影響して、コロナ禍前の日常に6～7割程度回復しているとの報道もあった。しかし、4月以降6月19日まで岡山大学の活動制限レベルは1.5のままであり、対面授業を実施する場合は、感染防止対策等を確認の上、部局長の決裁（BCS）が必要とされたものの、ほぼ全ての授業が対面またはオンライン併用で行われるようになった。5月22日には新入生と学生会、担任を中心にスポーツ大会が開催された。6月7日には対面授業実施のガイドラインが改正され、教室の学生数を収容定員の75%、状況に応じて100%も可能となった。学部内でも学生・教職員の感染報告が相次ぎ、感染拡大、活動制限レベル引き上げも心配されたが、6月20日以降1に引き下げられ、授業、実験実習ともに感染対策には配慮するものの、コロナ禍前の教育レベルに9割程度回復したと判断された。

7月30日（土）にFSCジュニア公開講座「牛について知ろうー牧場で学ぶ畜産ー」が小学生と保護者合計20名で開催された。中国・四国地区大学間連携フィールド演習科目の牧場実習（8月29日～9月2日）は、県外生にはホテル宿泊を前提にして、オンライン講義と津高牧場・学生実験室を併用したプログラム構成で実施された。「晴の国岡山」農場体験実習（9月20日～22日）もホテル宿泊を義務化して、岡山農場・津高牧場の対面実習を企画していたが、台風14号の北上に伴い、交通機関の乱れ、実習当日の荒天、ホテルキャンセルの問題等を考慮して、中止として各大学、履修者に連絡した。活動制限レベルは22年度末まで1で維持され、感染対策は研究室内での炭酸ガス濃度測定や抗原検査キットの配付が行われるようになったが、定着するには至らなかった。学部でも授業、実験実習はコロナ禍前にほぼ回復したように思えたが、引き続き学生の感染報告が散発的にみられた。岡山大学×真庭市 SDGs を目指す産業体験講座、地域活性化システム論、農学部フェア・収穫祭も健康チェックシートの提出を条件として一般市民にも公開され、センターではサツマイモ収穫体験に協力した。10月からはオミクロン株対応ワクチンの接種も始まったが、ワクチン疲れか、接種率はあまり高まらないままに新年を迎えた。正月休みの人の移動で上旬の感染率はピークを迎えたが、その後3月に向けて急速な低下が見られ、本年度の活動制限レベルは1のままで維持された。政府の方針では5月8日以降、新型コロナウイルスの感染法上の分類を季節性インフルエンザと同じ「5類」に引き下げることを決定しており、2023年度には、早期に収束することが期待される。

センター長に就任して4年目となり、本年度末で退任するとともに、定年退職を迎える予定である。新任センター長もこれまでの様な教員による選挙ではなく、学部長指名と変更された。コロナ禍に翻弄された後半3年間であったが、終息の兆しが見え始め、安心して退任できることを心より喜んでいる。オンライン授業は時間や場所を選ばず主体的に学習できるメリット、強制力がない分、自主性に任されるデメリットがある。対面授業のメリットは教員・学生とコミュニケーションがとれること（理解度・競争心）、実験実習のように観察や経験、技術スキルを修得する上で不可欠である。農学の基本は実学であり、その実践教育の場としての附属農場がある。農業教育にあっては、実際に生きる作物の栽培や家畜の飼育を実践する技術の習得や態度を養う上で、農場実習の重要性は大きい。すなわち、農場実習は対面授業でしか開講し得ないことを示している。

全国大学附属農場協議会は、2021年5月14日に「教育シンポジウム ポストコロナ時代における新しい農場教育の在り方とはーオンラインと対面実習の活用方法を考えるー」を開催し、ポストコロナ時代における新しい農場教育の在り方について議論した。近年、教育現場においてもデジタル化、リモート化が進み、オンライン授業の有用性が注目され、デジタルトランスフォーメーション（DX）化が進められている。この動きは新型コロナウイルスの影響により急速に拡大し、各大学農場においてもオンライン授業を導入しながら農場実習効果を高められるよう、授業実施方法を模索する動きがみられ、宇都宮大学、北里大学、神戸大学、広島大学、東海大学からオンライン実習の事例が紹介された。

NHKや民法で企画されるスポーツ教室や趣味の園芸、料理教室などは、テレビ番組やYouTube番組は数多くマスメディアに掲載されているが、実践を伴うものではなく、スポーツや料理、家庭菜園での栽培を実際に行うときに必要とされる技能やスキル、コツを教授するものである。実際にスポーツや家庭菜園、料理を行う場で、指導者から直接指導を受けるわけではない。農場実習においてもDVDやYouTubeを視聴した

上で、実際の作物の栽培管理方法を指導できれば、農場実習の教育効果は著しく向上するであろう。スマート農業技術の進展によりドローンや収量コンバインの作業を見学する実習も行われているが、これはこれで、将来の農業技術革新に向けて、可能性や困難性を考える機会としての意義は大きいと考える。基調講演を行った、長尾会長は実習については、94%の学生が対面での実習を望み、学生は、対面実習でしか得られない匂いや手触りや空気感などの五感への刺激やクラスメイトとのコミュニケーションを重要視していると述べている。そして、「百聞は一見に如かず」「百見は一考に如かず」「百考は一行に如かず」（中国「漢書」より）を引用して、農場実習における様々な新しい体験、そこから得る五感と第六感への刺激、仲間や指導者とのコミュニケーションは、前頭前野を成熟させ、活性化し、経験知として蓄積され、学生が自ら考え、想像し、行動する力を育む。いまこそ農場実習を！で基調講演を結んだ。ポストコロナ時代においても、農場実習の意義は、実際のフィールドで変化する作物・家畜を観察し、それらを育む技術の習得や収穫から消費までの過程を理解することの重要性を実習に参加する学生や指導者と共有することにある。

この度、コロナ禍により編集が遅れていた2020, 2021, 2022年度のセンターの運営概要と研究報告をセンター報告第43, 44, 45号の合併号として取り纏めた。関係各位にご高覧いただき、ご意見を頂戴できれば幸いである。これで、私もお役御免となります。長年に渡り、大変お世話になりました。

令和5年3月

岡山大学農学部附属山陽圏フィールド科学センター

センター長 齊藤 邦行